

「お前が本気で新田村の問題を解決したいのなら、ここから更に南へ行ったところに箸蔵村という村がある。そこで高屋の権左という男に会えば解決策があるかも知れぬ。ただし箸蔵村は慣れたお前の足でも二日はかかるだろう。答えもそこにあるかも知れぬぞ」

芝山の問答が、一つの方向に導いているのを感じた。芽生えつつあった不思議な感情は今何をすべきか、徐々に形になっていく。

塾での日課を終えると芝山に礼をいい、帰路についた。帰りながらも自然と感情は高まる。

家に着いたのは日が落ち辺りが暗くなっていた。家には母と弟だけで、父は村の寄り

合いに行っているらしく夕食は三人だけで食べた。

春先とはいえ、夜になると冷え込む。母がよそつてくれた飯とすまし汁は心も体も温めてくれた。彦輔と弟の小輔は何度も「おかわり」と母に碗を差し出す。「はい、はい」と微笑みながら、飯碗いっぱい白い小山を差し出した。

食べ終る頃、表から扉の開く音が響いた。母は、それに気付くと桶に水をくみ、手ぬぐいを持って軒先に急いだ。父が帰ってきたのだ。彦輔は母の後から父を向かえる。

用意された桶の水で足を洗う父に、隣村の水不足を解決したいから、芝山先生に教えられた

箸蔵村に行きたいと願いだした。すると父は、手ぬぐいで足を拭きながら、彦輔の目を見る。

「百姓に生まれたお前に学問を習わせるとのは、お前自身のためだけでない。学問は多くの民のために使こうてこそ、始めて形となり利に結びつくもんじゃ、わしは、お前が民のために働くのであれば止めはせん」

それを聞いた母は、眉にしわを寄せ、心配そうに父を見る。母の持つ、ろうそくの灯が風に小さくゆらいだ。

彦輔は、父の思いに感謝した。まず反対されると思っていたからである。普通に考えれば百姓の息子が、田畑に出ることも無く、一文に

もならない学問を習っているのだ。これ以上の我がままは、人の目にどのように写るか心配でもあった。

みんなが寝静まった頃、母のさわは父に、「まだ十五歳の彦輔に一人旅をさせるのは心配じゃ」と何度も話した。父は、黙って聞いていたが、

「喧嘩の嫌いなあいつが、始めて進んで争いごとに介入しようとしておる。わしは、少し嬉しかったんじや。大人になろうとしている彦輔をわしらが信用してやらなければ誰が信用するのか」と母を戒めた。しかし、母は「心配じゃ」と納得していないようだった。

つぎ ひ はくらむら たびだ  
次の日、箸蔵村へ旅立ちの準備を慌しく行  
つた。およそ二日間の道のりは、始めての経験で  
あり、十五歳の彦輔にとつて冒険でもある。  
金銭面でもいつも援助してくれる祖母がやつて  
きて、路銀を懐に差し込んでくれた。母は早く  
から起きて握り飯を作り彦輔に手渡して今生の  
別れを惜しむかのように涙ぐんでいる。彦輔は、  
家族の暖かい思いに感謝し、村を後にするのだ  
つた。

しざんせんせい おし みち  
芝山先生に教えられた道のりは想像以上に険し  
いもので、街道といえる人通りのある道は半日で  
終り、それからは山や谷ばかりの細い獣道が続  
いた。なにより畳以外の場所では寝るのには始めてで、  
岩の硬さと寒さに耐えながら眠るには努力を要  
する。遠くから山犬の遠吠えが聞こえ、小さな  
物音がする度に目が覚めて、熟睡はおろか半時  
も眠れずにいた。夜がこれほど恐ろしいと感じた  
のは始めてである。

すこ あか  
少し明るくなつて歩き始めた。肌寒い朝の  
山道は朝もやが立ち込めて歩きづらい。覆いかぶ  
さるような笹の葉が唯一の道しるべだ。  
しばらく歩いてみると、薪を拾う老人が向こ

いた。

やまみち ある ひこすけ  
山道を歩く彦輔には、日頃から良く見る山の  
風景があつた。五剣山である。五剣山は八栗山と  
も呼ばれ中腹には霊場八栗寺があつて瀬戸の  
海岸からそそり立つその姿は霊峰に値する。  
彦輔は子供の頃からよく五剣山に登り遊んで  
いた。しかし、今、進む山道は比べものにならな  
いほどの高さで、始めて見る草花は興味をそそら  
れる。季節は四月の終り、日差しは柔らかく野に  
咲く小さな花々は彦輔を少なからず癒してくれ  
た。

ひ く はじ はる おわ  
日が暮れ始めると春の終りにもかかわらず  
標高が高いせいもあつて気温が一気に下がり始

うからとぼとぼと近寄つてきた。彦輔は慌てて、  
老人に駆け寄ると箸蔵村までは後どれぐらいか  
と尋ねる。  
老人は立ち止まり、まがつた腰を伸ばした。

「この道を半日も歩くと川に出るから、そこから  
三里じゃ」  
行く方向を指さしながら彦輔を見る。

「どこから来なすつた」  
「牟禮村です」  
「知らん名じゃ、さぞ遠くから来なすつたのじゃ  
ろうのお。気をつけて行きなされ」  
老人は乾かした猪肉を手渡して、何も無かつた  
ように山の中に消えていった。

老人から教えてもらった道を歩く。腹が減っている。いたが、もらった乾肉で腹の虫は暫くおさまっている。

日が陰り、黄昏がやってきた頃、彦輔は二回目の野宿をすることにした。明日の朝一番には、目的の箸蔵村にたどり着けるだろう。そう思うと、山犬の遠吠えは怖くなくなった。快晴の夜空は、ふるさとと全く変わりなく星がまたたき、時折吹く風はもう寒くはなかった。昨日の夜、眠れなかったことと、歩き疲れたことで、知らぬ間に睡魔が襲って、深い眠りに落ちるのだった。

箸蔵村は、現在の徳島県三好市池田町付近、

り着いた。小さな村だが山肌に民家が立ち並び、旅籠もあって街道筋の村として少なからず賑わっているようだ。

すると目つきの鋭い村役人らしき男と目が合った。腰に二本差し、左手を袖の中に隠して悠然と歩いてきた。

「ここは箸蔵村ですか」と訊くと「何者か」というので、彦輔は正直に名乗り、高屋の権左の家を探していると訊く。その男は風貌に似合わず優しく丁寧に教えてくれた。そして何か意味深な言葉を言い残す。

「へんくつな男ゆえ、気をつけられよ」  
そして男は何も無かったように悠然と立ち去

金毘羅さんと土佐を結ぶ街道の中間点であり多くの旅人はここを休息の場所とした。その街道は塩の道でもあり、瀬戸内からの物資が流通した交易の道でもあった。

強烈な日差しが、眠い目を襲う。すでにあたりは明るくなっていた。

彦輔は身支度を整え、歩き始める。すると昨日の老人がいったとおり、大きな川の堤に出た。堤を下り水辺で荷物を下ろした彦輔は手ぬぐいを首に巻いて顔を洗う。川の水は冷たく、口に含み咽を通り過ぎる感覚は爽快そのものだ。

川沿いに歩くこと一時、集落の入り口にたど

って行った。

権左の家は村はずれの高台にあるという。しかし、へんくつな男とは、どのような男なのか？それに水不足との関係は如何なるものなのか？とにかく会って話を聞くことが先決である。

村役人から教えられたとおり村のはずれまで歩くと、小さな百姓家らしき古びた家にたどり着いた。しかし納屋もなく百姓の家とは思えない。

軒につるしてある藁笠に目をやると、薄くはなっているが明らかに高屋の権左と書かれてある。

ここが目的の家と思い、小さな扉に向かって遠慮がちに呼びかけた。しかし返答が無い。今度

はもう少し大きな声で呼んでみる。期待とは裏腹に空しく彦輔の声だけが響くだけ。

留守かもしれないと思い、諦めて家の主が帰宅するのを待つことにした。

すると、その小さな引き戸がゆっくりと開き「どなたで？」と返答があった。

そこに立っていたのは同じ年頃だと思える少女である。背も彦輔と同じぐらいだ。端正な顔立ちだが肌の色は日に焼けて浅黒く、薄汚れた着物は男ものだろう。まるで山男のような成りをしていいる。束ねた髪だけが少女の面影を残していた。

「あの」と彦輔が話しかけようとした時、後から

太い声が響く。

「誰じゃ」

少女の後から現れたのは、大きな体に無精ひげと乱れた鬚、薄汚れた着物をまとった初老の男だった。それが高屋の権左であると直感的に確信すると、すがるような気持ちで話しかけた。

「高屋の権左さまとお見受けします。私は讃岐の国、高松藩、牟禮村に住む彦輔と申す者です。権左さまにお願いの儀あつてはるばるやって参りました」

男は探るような目つきでつま先から頭までなめるように見た。男の目が彦輔の目に焦点があうと「何じや」という。男はまぎれもなく高屋

の権左だ。あの村役人から訊いた、へんくつな男に間違いない。

(以上4月8日放送分)